

歌舞伎について

二七回生 林 裕 三

趣味の少ない私にとって歌舞伎鑑賞は学生時代からなんとなく好きだった。会社に入って初ボーナスを全額歌舞伎全集で費やした程だ。

江戸庶民が残した文化遺産と言えば、浮世絵、若干の文学、義太夫、長唄、常磐津、清元と言った三味線音楽、後は人形浄瑠璃や歌舞伎と揚げるのが普通だ。この最後に挙げた歌舞伎は、並び立てたこれらの諸要素、以前からあった能楽や雑芸の様式まで抱擁した特別な演劇である。それ故か歌舞伎は、日本人の根源にあるリアリズムを踏まえ、常に錦絵のような様式絵画美を追求してくれる。

歌舞伎座などの前に立つただけでその華やかさに圧倒されてしまう。まして演目が始まるとその比ではない。ある時は祭典のごとく、ある時は奔放な宴のごとくだ。暗く閉ざされた封建時代の社会の中で育まれた故か、江戸庶民の開放性を期待した芸術心が結集した

と共に、嫁入りさせるくんだりである。縦の流れはモータ駆動にてチェーンで繋がれた滝車と言うカラクリが引受け、横の流れは浪布手送りで見せる。この舞台を見た瞬間あつと驚く。

この他の舞台装置で驚くのは「青砥稿花紅彩画（あおとぞうしはなのにしきえ）」（通称・白波五人男）通常「浜松屋」の場のみ公演が多いが、盗賊の人が追いつめられ、川端に桜が咲く「稲瀬川勢揃い」の場と続く場合もある。ご存知の方も多いと思うが、一人ずつ美しい七五調で名乗りを上げ、客を酔わせる。この美しい場面は次の大スペクタクルを見せる予兆である。追い詰められた盗賊は極楽寺に逃げ込み、その一人弁天小僧がその大屋根での瓦模様を背景に（つまり大屋根は立てられている）十手、梯子のタテなど複雑な組合せの大立廻りを見せ、追手は“とんぼ”と言うアクロバチックな動きで手玉に取られ、主役を引立てて見せる。観念した弁天小僧は見事に立腹を切って果てると同時に、屋根は煽り返され、首領格の日本駄右衛門と共に山門がセリ上がってくる。山門の楼上で捕物が繰返され、さらに山門がセリ上がり、切り穴から追手

ようだ。

その典型を「楼門五三桐」所謂（石川五右衛門）で説明しよう。柏子木が入って幕が開くと、舞台は一面黒幕で覆われている。その幕の前で大薩摩（大寺院、深山幽谷の場面の幕開けに、幕の外で長唄の唄方と三味線方が立って豪快な演奏をやること）の前奏がある。前奏が切れたところで豪快に太鼓にて黒幕が振り落される。その瞬間今までの黒一色と対照的に一面の桜の花に朱と金の南禅寺山門が壮大な姿を見せ、楼上には凄味のある鬘を付け、金糸縫取りのどてら姿の石川五右衛門がいる。そして有名な「絶景かな、絶景かな」とリズムカルな台詞を聞かせ終えると山門ごとせり上がる。観客はもう理屈じゃない、ただただホウーとため息をつく。音楽の効果、色彩の美しさ、せりふのリズム、登場人物の美しさ。それらがすべて私を魅了する。

他に舞台装置で好きなのは「妹背山」、舞台中央から流れる吉野川がそのまま客席に流れ、ロミオとジュリエットのような話で川を挟んで両家が争い、この世で結ばれずに死んだ若い二人を哀れみ、死後、雛人形

役人の名奉行で有名な青砥藤綱が出て来て、二層の山門前に立つ。壮大なスペクタクルである。駄右衛門は他の者がすでに捕まったことを聞き「賢者と言われた藤綱殿ゆえ手向かいいたさぬ縄かけよ」と自ら逮捕され見得を切って幕となり、お客は満足して帰る。

歌舞伎の演目は時代物、世話物、舞踊物に分けられる。今回はストリーを理解しなくても舞台装置の豪華さに圧倒され、楽しめる演目を選び紹介した。因みに私は3階か4階の座席で楽しんでいる。高くても6千円の席で十分楽しんでいるのだ。